

『風に紅葉』注解(一)

大倉 比呂志

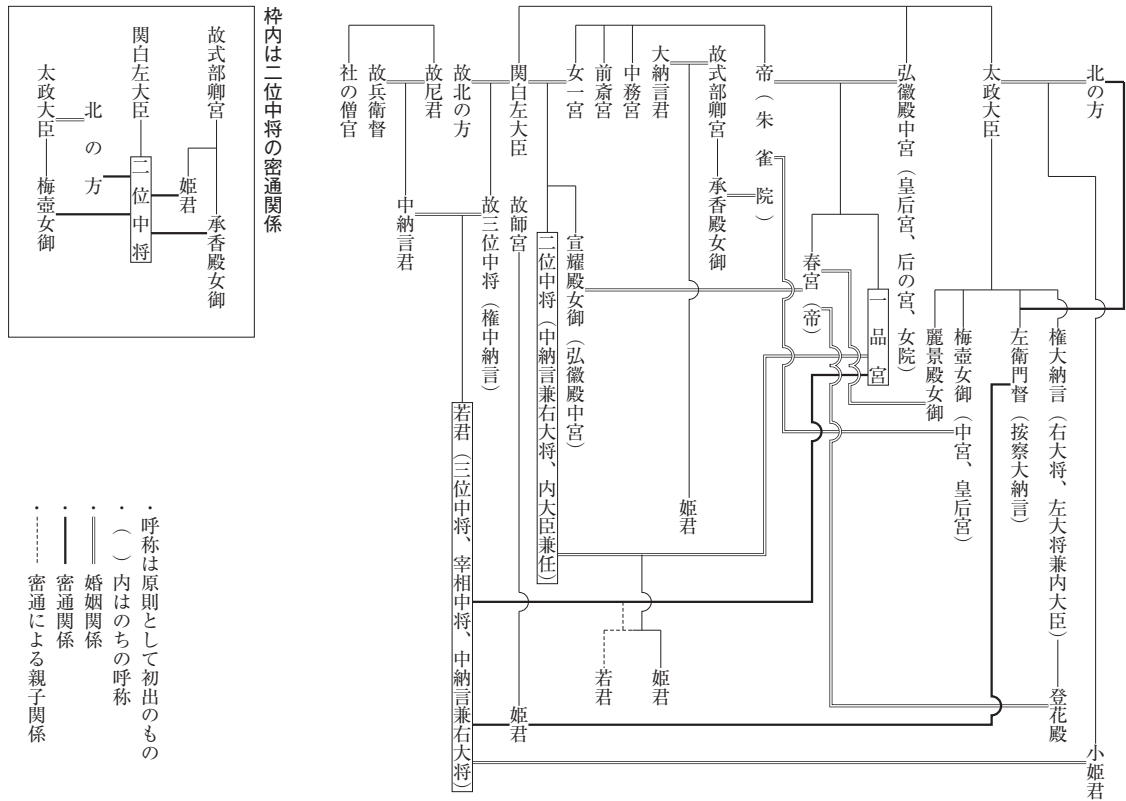
凡 例

- 一 『風に紅葉』の注釈を施すのに当たって、底本は宮内庁書陵部蔵の桂宮本を使用した。
- 一 本文には濁点・句読点を付し、会話・引用には「」（会話内の会話・引用には『』を施し、仮名遣いは歴史的仮名遣いに拠った。
- 一 適宜、底本の仮名を漢字に、漢字を仮名に改め、漢字には必要に応じて、振り仮名を施し、また送り仮名を補った。
- ・「承香殿」のようにいくつかの読み方が想定されるものは、底本の仮名書きに従い振り仮名を施した。
- ・M音・N音(「む」と「ん」、「らむ」と「らん」等々)は底本のままとした。ただし、「艶」など、底本の仮名書きが「えん」「えむ」を混在させている場合の振り仮名に限っては、「えん」のように統一を施した。
- 一 適宜、段落を設けて、小見出しを付した。
- 一 作中人物の詠んだ和歌は二字下げとし、その和歌の上に通し番号を付した(例、①色々の……)。さらに、作中和歌や地の文に他の和歌の典拠等が想定される場合には、【語釈】等の個所で典拠等となった和歌の訳を施した。
- 一 注が必要な場合には、本文の該当個所の右上に*印を付し、【語釈】の個所で説明を施し、【訳文】を示した。なお、問題点等がある場合には【考察】の項を設けたが、既発表の拙文と重なる部分もある点を御断りしておく。
- 一 読解の参考に資するため、登場人物の系図を掲げた。
- 一 学恩を蒙った注釈書類を引用する場合には、以下に示す略記号を用いることにする。必要な場合は、引用中の本文の表記を適宜補足し、漢字や仮名を改めた。

- 辛島 A 辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻一―」(文学論輯 三六号 一九九〇・12)
- 辛島 B 辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻二―」(文学論輯 三七号 一九九二・3)
- 関 関恒延『風に紅葉 依拠物語 本文 総索引』教育出版 一九九一・1
- 全集 中西健治校訂・訳注『風に紅葉』(中世王朝物語全集15) 笠間書院 二〇〇一・4

- 一 【語釈】【考察】で引用した和歌などの本文は次のものによるが、私に表記の一部を改めた個所がある。
- 新日本古典文学大系―古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、千載集、新古今集、平家物語
- 新編国歌大観―新勅撰集、続古今集、続拾遺集、新後撰集、玉葉集、続千載集、風雅集、新千載集、新続古今集、新葉集、古今六帖、躬恒集、山家集、拾遺愚草員外
- 新編日本古典文学全集―伊勢物語、うつは物語、源氏物語、浜松中納言物語、狭衣物語、とりかへばや物語、堤中納言物語所収作品、栄花物語、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、とはすがたり、十訓抄、催馬楽
- 日本古典文学大系―古代歌謡集(風俗歌)、大鏡、古今著聞集
- 日本古典集成―和漢朗詠集
- 平安朝歌合大成―六条斎院祓子内親王家物語歌合
- 岩波文庫―王朝物語秀歌選(風葉集)
- 中世王朝物語全集―海人の刈藻、石清水物語、いはでしのぶ、風につれなき、恋路ゆかしき大将、我身にたどる姫君
- 一 特に、辛島正雄氏の論稿には多大な学恩を蒙り、御礼申し上げます。
- 一 底本の使用を許可してくださった宮内庁書陵部に深く感謝いたします。

【系図】



・呼称は原則として初出のもの
 ・（ ）内はのちの呼称
 ・—— 婚姻関係
 ・—— 密通関係
 ・…… 密通による親子関係

卷一

一 序文

風^{*}に紅葉の散る時は、さらでも物悲^{かな}しきならひと言ひ置けるを、まいて
 老^{*}いの涙の袖の時雨^{しぐれ}は晴れ間なく、苔^{*}の下の出で立ちよりほかは、何の営
 みあるまじき身に、せめての輪廻^{りんね}の業^{ごふ}にや、昔見聞きしこと、人の語りし
 こと、そぞろに思ひ続けられて、問^{*}はず語りせまほしき心のみぞ出で来る。
 その中に、なべて物語などに言ひ続けたる人には変はりて、艶^{えん}にいみじう
 もあらず、波^{*}の騒ぎに風静かならぬ世のことわりを思ひ知るかとするれど、
 それも立ち返りがちによろづにつけて心得ぬ人の上をぞ案^{*}じ出だしたる。
 あまり聞き所なきは、昔にはあらぬなんめり。

【語釈】

* 風に紅葉の散る時は——「神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなくもの
 ぞ悲しき十月になって、風に紅葉が散る時は何となく悲しくて仕方がな
 い」(新古今集・冬・五五・藤原高光)に拠る。男主人公(二位中將・中納言
 兼右大將・内大臣と官職は異動するが、本文で男主人公の官職が明らかに語られ
 ている場合を除いては、男君と称する)の人生史の中で大きな転換点となっ
 たのは、正妻一品宮の死、それも九月二十日であった点に着目すれば、
 「もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり」紅葉の
 葉が秋風に吹かれるがままにどこに飛んでいくのかわからないのを見してい
 るよりも、それ以上にはかないものは人の命であった」(古今集・哀傷・八五
 九・大江千里)も視野に入れておく必要があり、特に第四・五句に注意す
 べきだろう。 * 老いの涙——「神無月降りそふ袖の時雨かなさらでももろ

き老いの涙に十月になって、時雨が降るのに加えて、そうでもなくともいつもより老いを嘆く涙によって朽ちやすい袖であることだ」(続拾遺集・雑秋・六三四・静仁法親王)に拠る。^⑧ *苔の下の出で立ち―死出の旅路への準備。 *輪廻の業―連声で「りんね」と読む。「輪廻の業」は中世王朝物語では管見の及ぶ限り、『恋路ゆかしき大将』に「端山ト女一宮トノ仲ハ」あぢきなくむつかしの世の中や。これも輪廻の業にこそあめれ」(巻五)と用いられており、その他には『今鏡』(打聞第十・作り物語の行方)や『梁塵秘抄口伝集』にもあるが、『源氏物語』には用いられておらず、「生死流転の原因となる悪業」(日本国語大辞典)の意であって、平安後期から中世にかけて使用されたことばであると考えられる。 *問はず語りせまほしき心―辛島Aは「包めどもたへぬ思ひになりぬれば問はず語りのせまほしきかな」隠しても恋の思いがこらえきれなくなったので、尋ねられもしないのに辛い思いを語り出したことだ」(千載集・恋一・六四八・大納言成道)をあげる。 *波の騒ぎに―「知りにつむ聞きても厭へ世の中は波の騒ぎに風ぞしくめる」既に知ったことだろう。改めて聞いて俗世を厭だと思え。世の中とは波の音の騒がしさに加えて風が後から後から吹いて来るようなものだ」(古今集・雑下・九四六・布留今道)に拠る。 *案じ出だしたる―辛島Aは「案じ、出だし」として、「思いめぐらして、お目にかけているのです、の意か」と一案を提示している。 *聞き所なきは―聞く価値がないのは。

【訳文】

風に紅葉が散る時は、そうでなくてさえ悲しいものだと言われているが、それ以上に、老いの涙で濡れる私の袖は乾く間がなく、死出の旅路への準備

以外には、どんな用事もなさそうなこの身には、余程、輪廻のなせるわざなのだろうか、昔見たり聞いたことや、人が語ったことが、やたらに思い続けられて、問わず語りをしたい気持ちだけが起こって来る。その中で、普通の物語などで語られて来た人とは異なり、魅力的ですばらしいわけでもなく、波の騒がしさのほかに風も吹いて穏やかではないこの世の無常の道理をなるほど思っているようだけれども、ややもすると俗世に引き戻されそうで、万事につけて理解できにくい人の身の上を考えついた。余り聞く価値がないのは、昔の話ではないからなのだろう。

【考察】

この序文は、先蹤として中世王朝物語の『風につれなき』のそれに、言の葉しげき呉竹の、世々の古言となりぬれば、何のをかしき節とてすぐれたる聞き所なけれど、おのづから心に止まりたる筋々を想ひ出でつつ、秋の明けがたき老いの寢覚めのつれづれなるままに、心をやりたりし問はず語りを書き集めて、止まらむ跡のあやしけれど。

とあり、注意すべきだと辛島Aは指摘している。

また、冒頭部が引歌によって起筆されている例は、『狭衣物語』では、

⑥少年の春惜しめどもとどまらぬものなりければ、三月も半ば過ぎぬ。御前の木立、何となく青みわたれる中に、^⑦中島の藤は、松にとのみ思ひ顔に咲きかりて、^⑧山時鳥待ち顔なり。

の傍線部①②は、

①夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな 藤の花は、春から夏にかけて咲きかかるものだったのだ。藤の花は、松に咲きかかるものだとばかり思っていたのに（拾遺集・夏・八三・源重之）。

②我が宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ Ⅱ私の家の池のほとりの藤の花が咲いたことだ。山に籠っている時鳥は、いつになったらやって来て鳴くのだろうか（古今集・夏・一三五・よみ人知らず）。

我が宿の池の藤波咲きしより山時鳥待たぬ日ぞなき Ⅱ私の家の池のほとりの藤の花が咲いてから、山時鳥がやって来て鳴くのを待たぬ日はない（躬恒集）。

に拠っている。さらに『逢坂越えぬ権中納言』では、

③五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう、秋の夕べにも劣らぬ風に、うち匂ひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、山時鳥も里なれて語らふに、三日月の影ほのかなるは、折から忍びがたくて、……

の②③は、

④五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする Ⅱ五月を待つて咲くという花橘の香りをかぐと、以前知っていた人の袖の香りがすることだ（古今集・夏・一三九・よみ人知らず）。

⑤足引きの山時鳥里なれてたそがれ時に名のりすらしも Ⅱ山時鳥が人里にすっかり馴れて、夕暮時に鳴いていることだ（拾遺集・雑春・一〇七六・大中臣輔親）。に拠っており、引歌がちりばめられているわけだが、その他に『風につれなき』や『木幡の時雨』にもあり、これは平安後期から中世王朝物語語にかけてしばしば見られる傾向であって、『風に紅葉』もその表現形態を継承

していると考えられる。ちなみに、『風に紅葉』に引歌として使用されている勅撰和歌集は、『古今集』が圧倒的に多く、ついで『後拾遺集』『新古今集』の順であるが、『古今集』は恋の歌が多く引かれ、『後拾遺集』では春部に属する歌が多く引歌として用いられている。

ところで、この序文では「苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みもあるまじき身に、せめての輪廻の業にや」の一文に表象されているように、仏教的色彩が強く、厭世的な雰囲気の色濃く漂っており、それは〈喪失〉ということと関わっているのではなからうか。すなわち、『風に紅葉』という作品は、北の方一品宮の死と承香殿女御の異母妹である故式部卿宮の姫君の行方不明事件を軸に、男君が加行のために官職までも返上するという多くの〈喪失〉が語られている物語であって、〈喪失尽くし〉を主題とした『浅茅が露』の影響も考えるべきだろう。とすれば、『風に紅葉』の冒頭の書き出しが「風に紅葉の散る時は、さらでも物悲しきならひと言ひ置けるを」で始まっているのは極めて表象的であり、まさに紅葉が風によって散るのであるから、そこにははかなさが内包されており、それが『風に紅葉』の主題に脈絡しているといえよう。

最後に「輪廻の業」ということばに一言触れておくことにする。『恋路ゆかしき大将』の梅津妹君の異父姉である梅津女君と端山との関係を知った恋路の妹の中宮（後に皇太后宮）が激怒した結果、娘で端山と結婚していた女一宮（一品宮）の産んだ若君を端山のもとに送り返すという状況にショックを受けた端山は官を辞して戸無瀬に籠るが、院の斡旋によって事態が好転し、皇太后宮は端山と女一宮との結婚を正式に認めたのである。この端山と女一宮との複雑な関係は「輪廻の業」と語られている（巻五）。既に辛島正雄が『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』との関わりを論じて

いるが『中世王朝物語史論』下巻第IV部の五 笠間書院 二〇〇一・9。初出、一九八六・3）、このように両作品に「輪廻の業」という語句が用いられていることに注意しておくべきだろう。

二 男主人公の家系

関白左大臣にて、盛りの花などのやうなる人おはす。北の方は古き大臣の御女、初元結の御契り浅からで住みわたり給ひし御腹に、いつしか若君出で来給ひて、世になうかしづかれ給ひしほどに、八年ばかりやありけん、今の帝の一つ后腹、女一宮とて、九重の内に雲居深くいつかれ給ひし姫宮を、いかにたばかり給ひけるにか、盗みきこえ給ひて、世の騒ぎなりしかど、あらはれ出てもいかがはせんに、御許しありしかば、御心ざし際もなくもていたつききこえ給ふめる御腹に、若君、姫君、また出で来給へるいつかしさ、げにこの世のものならず、光を放つと言ふばかりものし給ふを、朝夕この御かしづきよりほかのことなし。

さるままには、もとの上の御方をさをさまれになりゆく。三条わたりに住み給ひしかど、今少し東に寄りて、京極わたりに玉鏡と磨きて、宮の上と住みつき給へるほど遠からねば、車の音、前駆の声も、さながら移りて聞こゆる、いかが御胸安からむ。されど、若君元服し給ひて、三位中将と聞こえし、十四にて権中納言になり給ひし、次の年の春の末つ方、にはかに亡せ給ひにしかば、あさまし心憂しともなのめならずかし。さらでもものをのみ思ひ弱り給へる母上は、まして嘆きに耐へぬあまりにや、ほどなく競ひ隠れ給ひにき。大臣もさは言へど、あはれに心憂く思し嘆きしかど、まさる方のいたはしさにや、御言の葉にかけ給ふことだにまれになりゆく。あはれなる習ひなりかし。

【語釈】

* 初元結の御契り―「初元結」とは元服の時に、初めて髪のもとどり（髪の毛の頂を束ねた所）を結うことで、既に辛島Aに指摘されているように、光源氏の父桐壺帝が光源氏と結婚する葵上の父左大臣に対して「いときなき初元結に長き世を契る心は結びこめつや」幼い君が初めて結んだ元結に、あなたの娘との末長い縁を約束する気持ちをこめたのか（源氏物語・桐壺巻）の歌を詠みかけている。* 今の帝の一つ后腹、女一宮とて―御許しありしかば―辛島Aは「関白左大臣による女一の宮略奪のくだりは、『いはでしのぶ』巻一卷頭に見える右大臣（左大将の養父関白の弟）による女一の宮略奪事件の設定・措辞を襲っている。また、ここでの人物設定全体としては、『恋路ゆかしき大将』巻一冒頭における、初め右大臣の娘と結婚していた戸無瀬の入道が、後に式部卿宮の美しい娘を盗み出して熱愛し、二子に恵まれたものの、「もとの上」は夫の愛の移ろいを嘆いて死ぬ、という設定と酷似する」と指摘している。* もとの上―最初の北の方。

* 玉鏡と磨きて―辛島Aは参考として、「殿の西の対を、玉鏡と磨きておはす」（海人の刈藻・巻二）をあげる。* 宮の上―女一宮。* 車の音、前駆の声も、さながら移りて聞こゆる、いかが御胸安からむ―「車の音、前駆の声も、さながら移りて」とは、前を素通りして通過して行く状況を意味し、これを「前渡り」と称している。ちなみに『蜻蛉日記』において、夫兼家が愛人のもとに通うために道綱母郎を素通りして行く件（例えば、中巻天禄二年（九七二）の正月の記事）が典型的である。* 嘆き―我が子を失った嘆き。* まさる方―女一宮。* あはれなる習ひなりかし―草子地。辛島Aは参考として、「故宮の御ことを尽きせず思し嘆きながらも、若う盛りにをかしげなるただ今の見る目には、こよなく移ろひて、忘れ草の種とな

りぬるも、あはれなる世の習ひなりけるとぞ」(石清水物語・上巻)をあげる。

【訳文】

関白左大臣で、盛りの花などのような人がいらしかった。北の方は昔の大臣の御娘で、初元結以来の御縁が浅くはなく、夫婦としてお過ごしになっていたその御腹に、早くも若君がお生まれになって、非常に大切に育てられていらしかったうちに、八年ほど経ったのだろうか、今上帝と同じ后腹で、女一宮といって、宮中の奥深くで大切にお世話されなされた姫宮を、関白はどのように計画なさったのか、盗み申し上げなされて、世間の騒ぎとなったが、表沙汰になった以上どうしようもなくて、帝の御許があったので、御愛情がこの上なく、大切にお世話申し上げなされたらしいその姫宮の御腹に、また若君と姫君がお生まれになったが、その重々しさは、本当にこの世のものとは見えず、輝くような美しさというほどでいらっしゃるので、関白は朝夕大切にお世話をする以外、ほかのことは何もなさらない。

そうなってみると、もとの北の方への訪れは、ほとんど稀になっていく。北の方は三条あたりに住んでいらしかったが、関白はもう少し東寄りの京極あたりにすばらしい邸宅を設けて、宮とお住みになっていたその距離はそれほど遠くではなかったので、関白の車の音や前駆追う供人の声も、北の方にとってはそのまま聞こえてくるので、御心が穏やかであろうはずもない。しかし、若君が元服なさって、三位中将と申し上げ、十四歳で権中納言におなりになった、翌年の春の末頃、突然お亡くなりになったので、北の方にとっては情けない、辛いというような言葉では表現できないほどであった。そうでなくてさえ物思いで弱っていらっしゃる母上は、その嘆きに耐えられなくなったのか、間もなく争うようにお亡くなりになってしまった。関白もそ

うはいつても、悲しく辛いとお嘆きになったけれども、愛情を傾けている女一宮のことを大切にお思いになるのか、このことについて関白が口になることさえも珍しくなっていく。これは悲しいこの世のさだめだったのだ。

【考察】

男君の父関白による女一宮略奪事件が冒頭で語られていることは、男君の女性関係に影響を与えたと考えられはするものの、男君のそれは父親とは異なり、年上であると同時に、いわば人妻である高貴な女性たち(太政大臣北の方、梅壺女御、承香殿女御)からの強烈なアプローチが語られている点に注目すると、この『風に紅葉』という作品は〈女すすみ〉を中心とした男君の女性関係史ないしは女性遍歴史であるといえよう。

また、冒頭で帝の寵愛する大納言典侍が源中将に盗まれた件が語られている『浅茅が露』は『いはでしのぶ』『恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』の三作品における女性略奪事件と何らかの関わりがあるのではないかと推測されるが、後考を期したい。

ところで、関白の息権中納言と関白北の方とが引き続いて死去するわけだが、本節の終わりは、

あはれに心憂く思し嘆きしかど、まさる方のいたはしさにや、御言の葉にかけ給ふことだにまれになりゆく。あはれなる習ひなりかし。

とあり、傍線部で関白の心移りに対する語り手の感慨が念を押す形で語られている。【語釈】の項でも取り上げたが、『石清水物語』上巻巻末の「忘れ草の種となりぬるも、あはれなる世の習ひなりけるとぞ」と類似している。『源氏物語』桐壺巻であれほど桐壺更衣を寵愛し、その死を痛嘆した

桐壺帝が、更衣と似ている先帝の四宮（藤壺）が入内した結果、

思しまぎるとはなけれど、おのづから（桐壺帝ノ）御心（ガ故桐壺更衣カラ藤壺ニ）うつろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれるわざなりけり。

と語られている傍線部の影響を『風に紅葉』と『石清水物語』は蒙っていると考えられる。

三 男主人公の元服と女一宮（一品宮）との結婚

年月隔たりて、この若君、十三にて元服し給ふ。やがてその夜、正二位の加階賜りて、中将と聞こゆ。御容貌こそあらめ、心ばせ世にありがたう才の賢さ、詩賦、管絃をはじめ、紀伝、明経、日記の方、すべて暗きことなく、今より朝廷の御後見し給はんに飽かぬことなし。帝もめでさせ給ひて、「父大臣の雲居を分けて、この母宮ゆゑ、世の騒ぎなりしもむつかし。これをば我と召し寄せむ」とて、元服の次の年、中納言にて右近の大将かけさせ給ひて、春宮の一つ后腹の一品宮の御具になり給ふほどの儀式、世の常ならんや。后の宮は弘徽殿におはしますに、姫宮を貞観殿に移しきこえ給ひてぞ召し寄せられ給ふ。宮は一年が御兄なり。さこそはあらめど、気高うなまめかしうたをたをとうつくしう、飽かぬことなくおはしませば、御心ざしも世の常ならず。父大臣は母后の御同胞、母宮は父帝の御同胞なれば、いづ方も作り合はせたらんことのやうなり。

【語釈】

* 賜りて―底本は「給て」とあるが、意味上「給はりて」と解して「賜りて」とした。* 紀伝―大学寮の学科の一つで、史記、漢書などの史書を

学ぶもの。* 明経―経書（儒教の基本聖典）を学んで明らかにすること。

* 日記の方―有識故実の方面。* 帝もめでさせ給ひて、「父大臣の雲居を分けて、この母宮ゆゑ、世の騒ぎなりしもむつかし。これをば我と召し寄せむ」とて―辛島Aは「二位中将の一品の宮との結婚のくだりは、『いはいでしのぶ』巻一での左大将と一品の宮との結婚の経緯を模す」と指摘する。* 中納言にて右近の大将かけさせ給ひて、（世の常ならんや―辛島Aは参考として、「権中納言にておはせしを、左大将をかけさせ給ひて、師走の二十日余りのほどにこそ大将参り給ひしか。その夜の儀式、有様おろかならんや。上なき御位に定まらせ給はむとても、限りあれば、何ごとかはこれには過ぎんとぞ見えし。弘徽殿は中宮もおはします。上の御局も近しとて、梅壺をぞ玉鏡と磨きて、渡らせ給ひにし」（いはでしのぶ・巻一）をあげる。なお、「具」は配偶者の意。

【訳文】

年月が過ぎて、この女一宮腹の若君は十三歳で元服なさる。すぐにその夜、正二位の加階をいただいて、中将と申し上げる。御容貌はもろろのこと、気立ても実にすばらしく、学問に秀でていることは、詩賦、音楽はもとより、紀伝、明経、日記の方面にまで、まったく通じていないところはなく、今から朝廷の補佐をなさっても足りないところはない。帝も賞讃なさって、「父関白が宮中に忍び込んで、この母宮のために大騒ぎになったのも面倒だ。この若君を自分のもとに召し寄せよう」とおっしゃって、元服の翌年、中納言で右近大将を兼任させなかって、春宮と同じ后腹の一品宮の御夫におなりになった時の儀式は、世間並であるわけがない。后宮は弘徽殿にいらっしやるので、一品宮を貞観殿にお移し申し上げなかって

男君を呼び寄せなさる。一品宮は男君より一歳年上である。とは言え、一品宮は高貴で上品で、しとやかで愛らしく、物足りない点もなくていらっしやるので、男君の御愛情も一通りではない。父関白は一品宮の母後の御兄で、男君の母宮は一品宮の父帝の御妹であるから、どちらもうまく作ったような間柄であった。

四 男主人公の妹の姫君と春宮との結婚

春宮は姫宮に一年が御弟なるに、また殿の姫君、その年の四月に参り給ふ。御局、宣耀殿なり。御仲らひまたおろかならんや。御元服の頃より候ひ給ふ殿の御兄の太政大臣の御女、麗景殿と聞こゆる、ことに御覚えおろかなるに、これは我ながらけしからぬまでの御心ざしなり。上の中宮を思ひきこえさせ給へるに、限りあれば、いかにとかはまさるべきならぬを、上は限なうおはしまして、采女が際までも、容貌をかしきをば御覧じ過ぐさず。御方々もあまた候ひ給ふを、いづれも御情けありてもてなさせ給ひて、その上に后宫の御心ざしは類なければこそ、ものの映えにてもめでたきを、これは御心をも散らさず、なほなほ参り給ふべき人々おはすれど、御あひしらひだになければ、みな思しも立たず。

【語釈】

*弟―底本は「をとゝうと」とあるが、「ゝ」を衍字と考えて、「をとうと」とする。 *その年―男君が一品宮と結婚した年。 *御局、宣耀殿なり―「御局は桐壺なり」（源氏物語・桐壺巻）と同趣の語られ方。 *采女が際までも、容貌をかしきをば御覧じ過ぐさず―「采女」は宮中で炊事、食事などを任務とした女官。大化以前は地方豪族の子女から選んだが、令

制では郡司の子女で容姿端麗な者を選んだ。「うねめ」ともいう。辛島Aは参考として、「帝の御年ねびさせ給ひぬれど、かうやうの方え過ぐさせ給はず、采女、女蔵人などをも、容貌、心あるをば、ことにもてはやし思し召したれば、よしある宮仕へ人多かる頃なり」（源氏物語・紅葉賀巻）をあげる。

【訳文】

春宮は一品宮より一歳下であるが、また関白の姫君が、その年の四月に入内なさる。御局は宣耀殿である。この二人の御仲もまた並一通りではない。春宮の御元服の頃からお仕えなさっている関白の御兄の太政大臣の御娘で、麗景殿と申し上げる方は、春宮の御寵愛は特に劣っているのに、この宣耀殿に対しては並はずれた御寵愛である。帝は中宮を大切にお思い申し上げなさっているのに、他の女性に対する愛情は限度があり、中宮以上の御寵愛を受けられるはずもないが、帝は女性に抜け目がなくていらっしやって、采女のような低い身分の者に対しても、容貌の美しい女性を見逃されることはない。お后たちも多くお仕えなさっているが、どの方にも御愛情を持って扱いになって、その上で中宮に対する御愛情は並ぶ者がないので、見映えがしてすばらしいのに、春宮は他の女性に御愛情を分け与えなさるようなことはせず、まだまだ入内なさりそうな女性たちはいらっしやるものの、お相手にさえなさらないので、誰も皆宮仕えしようと決心なさることもない。

【考察】

春宮と結婚した関白の娘宣耀殿女御のことは、「御局、宣耀殿なり。御

仲らひまたおろかならんや」と語られており、その傍線部は桐壺更衣の「御局は桐壺なり」（桐壺巻）という叙述と極めて類似している。それに対して、「（春宮ノ）御元服の頃より候ひ給ふ殿の御兄の太政大臣の御女、麗景殿と聞こゆる、ことに御覚えおろかなるに」とあるように、先に入内した麗景殿への愛情が薄い点から、宣耀殿とは正反対であると同時に、桐壺帝に最初に入内した右大臣女の弘徽殿女御は「やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせ給ひける」（桐壺巻）であるにもかかわらず、帝寵は桐壺更衣に劣ると語られている点と類似している。すなわち、宣耀殿の語られ方は帝の寵愛する桐壺更衣と同じであるのに対して、麗景殿の叙述のなされ方は、桐壺更衣の死後に入内した藤壺が「藤壺と聞こゆ」と語られているのと同様な叙述であるにもかかわらず、麗景殿は春宮の愛情が薄く、帝寵が厚い藤壺の場合とは正反対である。このように桐壺巻の後の局の叙述の仕方を利用しながら、ズラして用いられているところに『風に紅葉』の工夫の跡が認められよう。

さらに、「上は隈なうおはしまして、采女が際までも、容貌をかしきをば御覧じ過ぐさず」とあるように、帝はどのような階層の女性たちにも目を向ける、いわば女性関係における博愛主義者もしくは好色者のごとき語られ方がなされているわけだが、桐壺帝も、【語釈】の項で例示した本文を再度掲出すると、

帝の御年ねびさせ給ひぬれど、かうやうの方え過ぐさせ給はず、采女、女蔵人などをも、容貌、心あるをば、ことにもてはやし思し召したれば、よしある宮仕へ人多かる頃なり。（紅葉賀巻）

と語られている。とすれば、帝は桐壺帝と同様な好色者であると考えられる。以上のように、第四節は桐壺巻及び桐壺帝の叙述の影響を多大に蒙っているといえよう。

五 主人公の北の方一品宮の懷妊

*^一一品宮、夏頃よりいつしか契り浅からぬ御心地に悩ませ給へば、殿の内磨きしつらひて出だしきこえ給ふ。大将も嬉しく思したり。かくすぐれぬる人は、必ず心尽くしをもととしてこそ、艶にあはれに面白うもあるを、さこそあれ、さやうの乱れも御心の底よりなし。何かはさしもあだなる世に、あながち心尽くしなることもあるべき。さるべきにまかなひおかれたる女宮の御さまの、何事こそ飽かずとおぼゆることもなし。さればとて春宮の御仲らひのやうは、けしからぬまではあらず。大方、何事にも静まりたる御心癖にて、限りなうあはれに、おろかならずは思ひきこえ給へり。さこそあれ、夜をも隔て側めたる御ことのまじらぬぞ、あらまほしう、念なきとも言ひつべき。

【語釈】

* 一品宮、夏頃よりいつしか契り浅からぬ御心地に悩ませ給へば、殿の内磨きしつらひて出だしきこえ給ふ―『紫式部日記』の冒頭寛弘五年（一〇〇八）七月頃の記事にも、出産のために中宮彰子が道長邸（土御門邸）に退出した状況が語られている。「契り浅からぬ」は懷妊したことをさす。

* かくすぐれぬる人は、（あながち心尽くしなることもあるべき―草子地と解せられ、辛島Aは「これまでのめでたしづくめの記述について、読者の先回りをして弁解した」と述べる。なお、「すぐれぬる人」とは男君

のこと。*念なきとも言ひつべき―辛島Aが「この物語には、一人の女性だけを熱愛する男性は興醒めであるとの思考が、随所に現れる」と指摘しているように、物語の進行につれて男君の数多くの女性たちとの情交が語られていく。「念なし」とは残念だという意。

【訳文】

一品宮は、夏頃から早くも御懷妊による悪阻にお苦しみになったので、関白邸の中を美しく整えて宮中から退出させ申し上げなさる。大将も嬉しいとお思いである。このように抜きん出た男君は、必ず物思いが根底にあって、優美でしみじみとして魅力的なのだが、そうは言うものの、そのような心の乱れも心底おありではない。どうしてこれほどはかない世の中に一途に物思いの限りを尽くすようなことがあるうか。そうなるべき御縁として運命づけられた一品宮の御様子の、万事につけて物足りないと思われる点もない。だからと言って春宮と宣耀殿の御仲のように異様ではない。万事、男君はどんなことにも穏やかな御性分であって、一品宮のことをこの上なく愛情深く、並一通りではなくお思い申し上げなさっている。そう言うものの、夜毎に他の女性たちのもとにお出かけになるといいうことがないのは、理想的だが、残念だとも言うべきだろう。

六 男主人公を思慕する女性たち

さるは、少しも立ち出で給ふ度には、御方々の戸口も安からず、御袖の棲、御下襲の裾をひかへつつ、鶯の音に鳴きつべきとかこち、宿にふすぶる蚊遣火の下燃えを愁へ、尾花にまじり咲く花の色にや恋ひんと嘆き、降る白雪の下消えて消え返りつつ、時、折節につけては安き空なきを、恐ろ

しうさへおぼえ給ひて、限々しき方をば通らじ、とさへぞし給ふ。御隨身などには、色々の色紙、薄様、大きに小さく、一度の御歩きには一つかみづつ参らするを、さすがはほほ笑みて、女宮とぞ御覧ずる。おのづからさにと知らるる節もまじるらめど、大方、さる岩木に身をなしてぞ過ぐし給ふ。石清水の臨時の祭に、参う上り給へる御方々の御心の中にも、面々に、霞の内の桜花とのみぞ見やりて惜しまれ給ふ。還立、夜に入りてあるに、過ぎ給ふ御簾の内より御袖をひかへて、いささかなる物を御手に入るを、さすが落とさじ、とひき側めて見給へば、

①色々のかざしの花も何ならず君が匂ひにうつる心は

片仮名になべてならぬ書き様なり。

【語釈】

*鶯の音に鳴きつべき―我が園の梅のほつえに鶯の音に鳴きぬべき恋もするかなⅡ私の家の庭の梅の梢で鶯が激しく鳴くように、私も声を出して泣いてしまうような恋をすることだ（古今集・恋一・四九八・よみ人知らず）に拠る。*宿にふすぶる蚊遣火の下燃え―夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我が身下燃えをせむⅡ夏だから私の家の蚊遣火がいつまでもくすぶっているように、いつまで私はこっそり思いを燃やし続けるのだろ（古今集・恋一・五〇〇・よみ人知らず）に拠る。*尾花にまじり咲く花の色にや恋ひん―秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや恋ひん逢ふよしもなみⅡ秋の野の穂の出た薄にまじって咲いている花のように、私ははっきりと自分の気持ちを顔に出そうかしら。あの人にほかに逢うことができる方法がないのだから（古今集・恋一・四九七・よみ人知らず）に拠る。*降る白雪の下消えて―かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふ頃

にもあるかな。あたり一面を暗くして降る白雪が下の方で溶けて消えるように、消え入るような恋をするこの頃だ」(古今集・恋一・五六六・壬生忠岑)に拠る。*安き空なきを―「雨やまぬ山の雨雲たちにも安き空なく君をこそ思へ」雨がやまないために、山にかかる雨雲が動くにつけ止まるにつけても気が休まらないように、立ったり坐ったりして安らかな気持ちになれず、あなたのことを恋しく思っている」(玉葉集・恋一・一三三二・紀貫之)に拠る。*限々しき方―あちらこちらの女性たちの意で、全集は「あまりそうした女性方(私云、男君に恋慕している女性たち)の部屋の前」と訳す。*一度の御歩きには一つかみづつ参らするを―辛島Aは「ひとめぐり歩き終わると、いつも片手いっぱいこのラヴ・レターがある、という諧謔」であると述べる。*さにや―あの女性からの文であろうかと。*岩木に身をなしてぞ―「岩木」とは非情なものたえで、女性たちから贈られた恋文を無視して。*石清水の臨時の祭―毎年三月、中の午の日に^{うま}行われる。ここで年が変わり、男君、十五歳。*霞の内の桜花―「匂ふらむ霞の内の桜花思ひやりても惜しき春かな」美しい色に染まっているだろう霞の内の桜の花だ。思いを馳せるにつけても過ぎ去って行く春という季節が惜しまれることだ」(新古今集・恋一・一〇一六・清原元輔)に拠る。*還立―祭の翌日、祭に派遣された使いの一行が宮中に戻った折、行われる賜宴。*片仮名―和歌は平仮名で書かれるのが普通であるが、意図的に片仮名で書くことによって、「差し出し人をカムフラージュするためでもあろう」(辛島A)と考えられるとともに、和歌を受け取る男君に対して強力なインパクトを与える目的もあるか。このような事例は『うつほ物語』(国譲上に一例あり。『源氏物語』にはなし)をはじめとして、『狭衣物語』『虫めづる姫君』『石清水物語』『兵部卿物語』にあり、主に平

安後期から中世にかけての物語文学に見受けられる。和歌における「片仮名」による表記は、相手に対して自己を隠蔽して相手を欺瞞すると同時に、相手に強烈な印象を与えるという二重の意味を内包しているのであろう。

【訳文】

実のところ、男君が少しでも宮中にお出かけになる度に、女性たちの部屋の戸口では気が気ではなく、男君の御袖の端や御下襲の裾を押さえて、「鶯の音に鳴きつべき」辛い恋へのぐちを言い、「宿にふすぶる蚊遣火の下燃え」の秘めた恋を嘆き訴え、「尾花にまじり咲く花の色にや恋ひん」と逢う方法がないのを嘆き、「降る白雪の下消え」のように死ぬほどに思い詰めつつ、その時々につけて心が休まる時がないのを、男君は恐ろしいとまでお感じになって、あちらこちらの女性たちの部屋の前を通るまいとさえないさる。男君の御隨身などには、様々な色の色紙や薄様の、大きいのも小さいのも、一回のお通り毎に一つかみづつ差し上げるのを、さすがに苦笑いなさって、一品宮と御覧になる。もしかしてあの女性だろうかと推測される文も混じっているようだけれども、大体は岩木のように身を処してお過ごしなさる。

石清水の臨時の祭に、神社に参詣なさった女性たちの御心の中でも、各々「霞の内の桜花」のようにはつきりとは見られない男君の方を見て惜しんでいらっしゃる。還立は夜になって行われたが、男君がお通りになる御簾の中から御袖を押さえて、ちょっとした文を男君の御手の中に入れるのを、さすがに落とすまいとして、自分の方に引き寄せて御覧になると、

①色とりどりの美しいかざしの花も物の数ではないわ。あなたの気品に

満ちた美しさに取り付かれた私の心にとっては。

片仮名で並々ではない書きぶりである。

【考察】

『古今集』恋一所収の三首が引歌として取り上げられている。いずれも「題知らず」「よみ人知らず」であるが、それらの和歌が隣合わせの状態（498・500・497の順）で引かれている点に注意を払っておく必要がある。これら三首は素材的にはともに〈忍ぶ恋〉が語られるのにふさわしいものだったといえよう。とすれば、『古今集』恋一所収の三首が意識的に用いられていると考えられるわけだが、それはまた『風に紅葉』における引歌状況の特色の一端を担っているといえよう。

また、前述の三首と「かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふ頃にもあるかな」の合わせて四首が近接して引歌として使用されている点に関して、辛島Aは、

春夏秋冬の恋の歌を順に引くことによって、一年中絶えることのない女たちの大将へのかなわぬ恋の嘆きを、季節の景物に寄せつつ表現した。なお、その典拠はすべて『古今集』歌であり、とくにはじめの三首は連続しており、『古今集』のテキストを横に置いて作文したのではないかとさえ疑わせる。

と述べており、首肯される見解である。

七 一品宮、姫君を出産

その頃ぞ、一品宮はいと平らかに女にてぞ生まれ給へる。御産屋の儀式、皇子たちに劣らず、さばかりの御仲らひどもにもてなし給はん、おろかならんやは。内裏よりの御産養、御文の歌など、常のことに珍しからねば、

*書き写すもうるさし。帝、后いつしかゆかしがりきこえ給へば、御五十日は内裏にて聞こし召すべきが、五月にて忌めばとて、七月ついたちにぞ参らせ給ふ。母宮も具しきこえ給ひて、しばしおはしませば、例の立ち去る方なくて候ひ給ふ男君の御さま目安し。

【語釈】

*産養―子供が生まれて、三日・五日・七日・九日の夜に行われる祝い。
*書き写すもうるさし―省筆の草子地。 *五月にて忌めばとて―祝い事は一月・五月・九月を避けるのが当時の風習だったらしい。 *七月ついたちにぞ参らせ給ふ―辛島Aは「五月を避けたのであれば、帝と后が孫の顔を見たがっていることからして、すぐ六月に祝いがあってよさそうところであるが、七夕に連続させるためにこう設定したものか。あるいは百日（ももか）の祝いに変更したものか」という。 *母宮―一品宮。

【訳文】

その頃に、一品宮は安産で女君をお産みになった。御産屋の儀式は、皇子たちの時に劣らず、あれほど素晴らしい間柄の御両親たちでお世話をなさるのだから、おろそかであるわけではない。内裏からの御産養や、御文の歌などは、普通のことと珍しくはないので、書き写すのも面倒である。帝や后は早く姫君に会いたいとお思い申し上げなさるので、御五十日は宮中で催しなさるべきだが、五月は忌む月だということで、七月上旬に参内させなさる。母一品宮もお供申し上げなさて、しばらくの間御滞在なので、いつものように一品宮のもとから立ち去るようなことなく御側にいらっしゃる男君の御様子は感じがよい。

【考察】

男君と一品宮との間に第一子である姫君が生まれたわけだが、そこに「御産屋の儀式、皇子たちに劣らず」という記事がある。姫君に対する儀式が皇子たちの時と同等であったと語られている点からすれば、将来姫君が入内して、皇室に参入し、中宮の地位に就く可能性が大であると予想されよう。姫君の両親の出自は問題なくすばらしいが、さらなる格上げが姫君には必要だったのではなからうか。それが直前の引用文だったのだ。光源氏が三歳の時に挙行された袴着の儀式は「一の宮（私云、光源氏の兄で、後の朱雀帝）の奉りしに劣らず」とあって、第二皇子である光源氏の儀式が第一皇子と同等の規模で催されたと語られており、紆余曲折があったにもかかわらず、藤裏葉巻で准太上天皇の位が授けられたという点からも、男女の違いがあるとはいえず、この姫君の将来は光源氏に準ずるものとして考えられるのではないのか（中宮の後、女院ないし国母が想定されよう）。そのためには光源氏のことの髪髯とするような語られ方が必要とされたのではないのか。だが、巻二後半において姫君の入内に関わる記事はないものの、父男君が修行に邁進するために内大臣の職を返上するという後ろ盾を欠いた状態での入内は、前途多難な状況が想像されるがゆえに、立場としては臣下でありながら、准太上天皇になった光源氏のことの基底に据えられているといえよう。

八 乞巧奠、宮中での管絃の遊び

七月七日、乞巧奠^{*きかくでん}のやう面白きに、七夕つめに貸さるる御琴をまづ調べわたさるるに、帝、御笛吹き鳴らさせ給ひて、姫宮に琴^{きん}の御琴勧めきこえさせ給ふ。中宮、御琵琶。春宮渡らせ給へれば、御笛をば奉らせ給ひて、

「三枝」など唱はせ給ふ御声めでたし。大将の君、簀子^{すこ}に候ひ給ふ用意、有様、色濃き御直衣^{なほし}に、女郎花^{をみなへし}の生絹^{すずし}、紅^{くれなゐ}の単衣^{ひとへ}、紫苑色^{しそん}の指貫^{さしぬき}、月の光をまばゆげにもてなし給へる景気^{*}など、いかにせん、とゆゑよしをもてなし給はねど、そぞろに身にしみ返り、見る人苦しき御さまなり。あづまをぞ賜^{たまは}り給ふ。更けゆくまに、御琴^{こと}の音^ねども空に澄み昇りて、面白しともなめのなり。上、

②今宵逢ふ七夕つめの睦言^{むつげん}に声うち添へよ峰^{*}の松風

春宮、

③雲居より声うち添ふる睦言に七夕つめも心ゆくらん

大将、

④雲居^{*}なる半ばの月に彦星もいとど心や澄みまさるらむ

【語釈】

*乞巧奠―陰暦七月七日の夜に行われる牽牛・織女を祭る儀式。 *三枝―「この殿は むべも むべも富みけり 三枝の あはれ 三枝の はれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや 殿づくりせりや」（催馬楽・呂・この殿）。 *景気―辛島Aは「仮名文において「景気」を「気色」と同義に使うのは、鎌倉時代以降のこと」という。 *あづま―東琴、和琴。 *峰の松風―「琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけん」琴の音に峰の松風の音が似ているように聞こえる。あの松風は、どの山の尾、すなわち、琴の緒から、美しい音を奏でているのだろうか（拾遺集・雑上・四五一・斎宮女御）。 *④「雲居なる」の歌―「半ばの月」に半月と琵琶の部位の異称のそれとを掛ける。辛島Aは「三首並んだ唱和の中で大将の歌のみが琵琶の音をとりあげているのは、琵琶の奏者

が中宮であることからすると、下文にかれが中宮に憧れていることが述べられるので、そのあたりの伏線かとも見られる」という。

【訳文】

七月七日、乞巧奠の様子は心ひかれるが、男君が棚機女にお供えになる御琴をはじめにお弾きになっていると、帝は御笛を吹き鳴らされて、一品宮には琴の御琴をお勧め申し上げなさる。中宮には御琵琶。春宮がいっしょだったので、御笛を差し上げなされて、「三枝」などをお歌いになる帝の御声はすばらしい。大将の君は簀子にひかえていらっしゃるが、その心づかいや様子は申し分なく、濃い色の御直衣に、女郎花の生絹、紅の単衣、紫苑色の指貫姿で、月の光をまぶしそうにしていらっしゃる御様子などは、どうしたらいいのかと困っていて、奥ゆかしく振る舞っていらっしゃるわけではないけれども、何となく身にしみる感じで、見ている人が切なくなるような男君の御様子である。帝が男君に東琴をお与えになる。夜が更けていくにつれて、御琴の音などが空に澄み昇って、趣深いというような言葉では言い表すことができない。帝は、

②今宵、彦星と出逢う織女の睦言に美しい音色を添えよ、峰の松風よ。

春宮は、

③彦星との睦言に宮中から楽の音を添えるので、織女も満足することでしょう。

大将は、

④大空にある半月、すなわち、宮中の琵琶の音色に、彦星もますます心が澄みまさるのでしょいか。

九 宣耀殿女御、懷妊

六月の頃より、また宣耀殿、珍しきさまの御心地なり。八月、三月にて出でさせ給ふを、春宮はいかにして耐へ忍ぶべしとも思されず。御消息のひまなく、かひがひしき御仲らひを、父大臣などもおろかに思されんやは。

【語釈】

* 珍しきさま―懷妊。

【訳文】

六月の頃から、また宣耀殿女御は、懷妊の御様子である。八月に妊娠三か月で退出なさるのを、春宮はどのようにしたら寂しさを我慢することができるのかをお考えになることができない。宣耀殿への御手紙は途切れることがなく、睦まじい二人の御仲を、宣耀殿の父関白などもいい加減に思いになろうはずはない。

一〇 男主人公に対する太政大臣の梅見の宴への招待と北の方との関係

年*も返りぬ。二月の空うらかなる頃*おほきおとど、太政大臣の御前の紅梅盛りなるを、大将の御もとへ、えならぬ枝を折りて、

⑤「我が宿まがきの籬むめの中の花むめ色も匂むひも誰か分わくべき

ただ今の夕べの空は、げにあやなく人の、とおぼえはべるをば、情なさけ捨てず立ち寄らせ給へ」とあるを、例*の常はまとはし給ふらん、とをかしくて、大臣*おとしに聞こえ給ひて、渡り給はん*とす。

⑥思*ひ分*く心の色は知らねどもよそに休*まん梅*の立*えち枝を

暮れかかるほどにおはしたれば、ただ今の花の軒近き妻戸の内へ入れきこえ給ふ。女房二、三人居たる奥の方に、紫の匂ひあまたに、紅の単衣、裏山吹の小桂着たる人の、二十六、七にやと見ゆるが、艶に優なるもてなしなるぞ、側みて居たる傍らに、紅梅上なる梅襲の衣どもに、萌黄の小桂着て、いと小さき人の、何心なくうちあふ退きたる顔つき、見まほしく愛敬づきたるぞ、やがてこの腹の姫君にや、とおぼゆる。思ひもあへぬ心地して、畏まりたるさまにて、端つ方に居給へば、大臣、「翁、無下に近付きたる心地しはべるに、この人のむつかしきほどしにおぼえはべる。ものめかさばこそ世の聞こえも便なうはべらめ、ただ候ふ人の列にて育ませ給ひなんや」と聞こえ給へば、「思ひも寄りはべらざりつる仰せ、畏まり入りて」とて、うち見やりきこえ給へる匂ひ、有様に、魂もやがて消え惑ふばかり、現し心もなくぞ上はおぼえ給ふ。

しばしありて、童のをかしげなる、紅梅の柏に、葡萄染めの表の袴、柳の汗衫着たる二人、沈の折敷に、瑠璃の盃据ゑて、銚子持ちたり。今一人は、箱の蓋に紅の薄様敷きて、こゆるぎのいそがしき肴持たり。「御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや」と、大臣の上に聞こえ給へば、居ざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将居直りて、色許りて見ゆる女房を、「こちや。いかが、さることは」とのたまへど、なほ押さへて奉り給ふを、「さらば、また」とて受け給ふほどの御気色、ただ死ぬばかりぞおぼえ給ふ。大臣の盃取り給ふ折、うち置き給へば、大納言の君と呼ぶるぞ奉る。大臣は例の我しもとく酔ひ給ふ癖にて、「無下に無礼にはべり」とて入り給ひぬれば、女の御気色近くてはいとど愛敬つき、をかしげにおはするに、酔ひ少し進みぬるまめ人の御心もいかがありけん。夕月夜の影はなやかに差し入りて、梅の匂ひもかごとがましきに、姫君の御新枕にはあら

で、あやしの乱りがはしきや。あさはかにとりあへざりける御契りかな。すべてこの物語の癖ぞかし。「作りける人の心の際も推し量られて、ものしうおぼえはべるや」と、書き写す人の言ひける。

ただ行きずりにだに鎮めもあへず、けしからぬならひの御人様をまして推し量るべし。男も、まだ知らずをかしう思されて、浅からざりける契りのほどを語らひ給ふにも、左衛門督をよそならず聞きしことを思し出でられて、

⑦「よそにのみ聞きこしものを松山の波越す末を我や恨みむ

ことわりなくや」と聞こえ給ふに、いとど心憂く、言の葉なくおぼえ給ふ。

⑧今よりは君をのみこそ松山に心を分けて波や越ゆべき

御心とまらずしもなく、ならはずをかしうおぼえ給へど、人目もむつかしうて、暁も待たずぞ起き別れ給ひぬる。

【語釈】

*年も返りぬ―男君、十六歳。 *太政大臣―男君の父親の兄で、伯父。

*⑤「我が宿の」の歌―辛島Aは参考歌として、「梅の花を折りて、人に贈りける／君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」あなた以外の誰に見せたらいいのか、この梅の花を。その美しさも香りもわかる人、それはあなただ」（古今集・春上・三八・紀友則）をあげるが、そのほかに「月の面白かりける夜、花を見て／あたら夜の月と花とを同じくはあはれ知るらん人に見せばや」そのままにしておくのは惜しいほどすばらしいこの夜の月と花とを、同じことならば、私よりもっと趣を解するような人に見せたいものだ」（後撰集・春下・一〇三・源信明）も考慮に入れるべきではなからうか。というのは、信明歌は友則歌のように「梅の花」ではな

く「花」(桜)とある点から問題はあるものの、後に「夕月夜の影はなやかに差し入りて」とある点からすれば、「月の面白かりける夜」という詞書とほぼ一致するので「あたら夜の」という歌も「君ならで」の歌と同様に、影響歌として考えるべきだからだ。*あやなく人の——「梅の花匂ふあたりの夕暮はあやなく人にあやまたれつつ」梅の花の香りがするあたりの夕暮時は、訪ねて来る人が袖にたきしめた香りに、わけもなく間違えてしまうことだ」(後拾遺集・春上・五一・大中能宣)に拠る。*例の常はまとはし給ふらん——後にその理由が語られているが、太政大臣は自分が年を取ったため、北の方との間に生まれた姫君(以下、小姫君と称する)がほだしとなるので、男君の愛人もしくは侍女でも構わないので世話をしてほしいと依頼している点から、小姫君に関する件を男君に直接頼みたいがゆえに、梅の花盛りを口実に何度も誘っているであろう。*大臣——太政大臣。

*よそに休まん——辛島Aと全集は「よそにやすぎん」とする。*思ひもあへぬ心地して——辛島Aは「太政大臣の北の方と姫君(私云、小姫君のこと)が、隔てもなく、丸見えなので」という。*翁——太政大臣が自身のことをいう。*無下に近付きたる心地しはべるに——死期にすっかり近づく。*この人——小姫君。*ほだし——直後に男君に小姫君の世話を依頼する太政大臣の発言がある点からすれば、男君の同情を引くために少々オーヴァーな物言いをしたか。*ものめかさば——小姫君を一人前に扱って、婿取りをすること。*候ふ人の列にて育ませ給ひなんや——男君の愛人もしくは、男君付きの侍女のような存在として世話をして下さらないか。辛島Aは「婉曲な結婚依頼である」という。*上——北の方。*沈の折敷——「沈」は熱帯地方で産した喬木(高い木)で、木質が重く、水に沈む。「折敷」は食器をのせるのに用いる盆。*瑠璃——七宝の一つで、青色の宝石。もしくは

は、ガラスの古称。*こゆるぎのいそがはしき——「玉垂れの 小瓶を中に据ゑて 主はも や 魚求^まきに 魚取りに こゆるぎの 磯の若布 刈り上げに」(風俗歌・玉垂れ)。「こゆるぎ」は相模国の歌枕。「こゆるぎのいそ(磯)」と「いそ(急)」がはしき」とが掛けられている。辛島Aは「急いで用意した酒肴、というようなことか」という。*御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや——太政大臣が北の方に男君に酒をつぐように言っているのは、「先に「さぶらふ人の列にて」と言っていたのを承けて、姫君の宮仕えの手はじめとして、母親(私云、北の方)に手本を示すように言ったもの」(辛島A)とする見解もあるが、「宮仕ひ初め」という発言には「お近づきのしるし」といった程度の意味が含まれているのではなからうか。*色許りで見ゆる女房——一般には禁止されている色彩・紋様のある衣服(禁色)の着用が許されている女房で、上臈女房。*さることは——北の方がお酌をすることは恐れ多い。*押さへて——北の方が男君に酒をつぐうとする女房を制止して。*うち置き給へば——北の方は夫の太政大臣に酒をつぐうとはせずに、銚子を下に置いたままにしている。辛島Aは「下心のある北の方は、大将へのサーヴィスにこれ務め、夫のことなど眼中にない」という。*無下に無礼にはべり——辛島Aは『源氏物語』藤裏葉に、「大臣、『朝臣や、御休み所もとめよ。翁いたう酔ひすすみて無礼なれば、まかり入りぬ』と言ひ捨てて入りたまひぬ」とある条の投影がある」と指摘する。*まめ人——男君のこと。「まめ人」とはまじめな人、もしくは実直な人の意味であるが、辛島Aは「からかい口調」で語られているという。*夕月夜の影はなやかに差し入りて、梅の匂ひもかごとがましきに——外は月の光が明かるすぎるし、梅の花の匂いが強いので、それらを避けるために室内に入るといふ説明を施して、やがて男君と北の方との間で繰り広げ

られる情事の伏線と考えられる。ちなみに、辛島Aは「ほろ酔い加減に、月影・梅の薫りと、情事を誘う条件が揃う」と指摘している。*あやしの乱りがはしきや―男君と北の方との情事に対する語り手の批判。草子地。
*すべてこの物語の癖ぞかし―今後、この作品は性愛描写が中心となることをあらかじめ暗示する。「ぞかし」は強調表現。*書き写す人の言ひける―乱れた内容の「物語を書いたことへの韜晦のポーズも窺われる」(辛島A)と指摘されている。*御人様―北の方の。*男も、まだ知らず―男君もこのような行きずりの情事の経験がなく、あるいは、高貴な年上の人妻との情事を持った経験がなくとも解される。*左衛門督をよそならず聞きしこと―太政大臣の息左衛門督が継母北の方と隠れた関係を持っていることを男君が耳にしたこと。*⑦「よそののみ」の歌―「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなん」あなた以外に、私が他の人と思う心を持つのなら、波が越えるはずのない末の松山を波が越えてしまいうだろう」(古今集・東歌・一〇九三・よみ人知らず)に拠る。*いとど心憂く―北の方にとって男君の歌の中で左衛門督との隠れた関係が暗示されているから。*君をのみこそ松山に―「松山」に「待つ」が掛けられている。*暁も待たずぞ起き別れ給ひぬる―辛島Aは「大将の女性関係では、夜深く別れるのが、以下お決まりの型となる」と述べている。

【訳文】

年も改まった。二月の空がのどやかな頃、太政大臣のお庭の紅梅が真盛りである時に、大将の御もとへ、すばらしい梅の枝を折って、

⑤「私の家の籬の中に咲く梅の花は、その色も香りもあなた以外に誰が分かってくれるでしょうか。」

現在の夕べの空に漂っている香りは、本当に訪ねて来る人の香りなのか、と思われますので、風流心を捨てずにお立ち寄り下さい」とあるのを、いつものように始終私に付きまといていらっしやるのだろうと興味がひかれて、太政大臣に返事を申し上げなされて、お出かけになろうとする。

⑥分別できるかどうかは私にはわかりませんが、私に関係のないものとして拝見することをやめられましようか、梅の立ち枝を。

暮れかかる頃に男君がいらっしやったので、真盛りの梅の花が軒近くに咲いている妻戸の中にお入れ申し上げなさる。女房が二、三人座っている奥の方に、紫を多く重ねて、紅の単衣に、裏山吹の小桂を着て、二十六、七歳かと思える人が、あでやかで上品な態度で、横を向いて座っている傍に、紅梅色を上にも梅襲の衣どもに、萌黄の小桂を着て、非常に小柄な人で、無邪気に上を向いた顔付きが、魅力的で愛らしいのは、すぐにこの北の方腹の姫君かと思われる。男君は思いがけない気がして、恐縮した様子で、端近に座っていらっしやると、大臣が「翁は死期にすっかり近付いたような気がしますが、この人とのことが面倒なほだしに思われます。一人前に婿取りをしたならば、世間の評判も不都合でしょうが、ただあなたにお仕える侍女の一人として面倒を見てくださいますか」と申し上げなさると、「思いも寄りませんでした仰せ、謹んで」と言って、北の方の方に目を向け申し上げなされた美しさと様子に、北の方はすぐに分別もなくなつてひどく途方にくれるばかりで、正気も失いそうにお思いになった。

しばらく経って、愛らしい童で、紅梅の相に葡萄染めの表の袴、柳の汗衫を着た二人が現れて、一人は沈の盆に、瑠璃の盃を置いて、銚子を持っている。もう一人は、箱の蓋に紅の薄様を敷いて、急いで用意した酒肴を持っている。「お近付きのしるしの手始めにつけても、あなたから」と大

臣が北の方に申し上げなされると、膝行して近付き、銚子を取って差し上げなさるので、大將は居まずいを正して、禁色を許されているらしい女房に、「こちらへ。どうして北の方とあろう御方がそのようなことを」とおっしゃるけれども、北の方はそれでも女房を制止して差し上げなさるのを、「それでは、また」と言ってお受けになる御様子に、北の方は死にそうなほど心を乱していらっしゃる。大臣が盃をお取りになる時、北の方は銚子をお置きになるので、大納言の君と呼ばれる女房が差し上げる。大臣はいつものように早くお酔いになる癖があつて、「非常に失礼ですから」と言つて奥の方に入つておしまいになつたので、北の方の御様子は近くで見るとますます魅力的で、美しくていらっしゃるために、少し酔っぱらつた真面目な男君の御心もどのようなであつたのだろうか。夕月の光が美しく差し込んで、梅の匂いも言い訳めいているが、小姫君との御新枕ではなくて、その母親が相手だつたとは、けしからぬみだらな関係であることよ。浅はかで性急な二人の御縁なのだ。すべてこのような内容が語られるのは、この物語の癖なのだ。「作者の心の程度も推測されて、不愉快に思われますよ」と、書き写す人が言つた。

単なる行きずりの関係でさえ心を鎮めることができず、けしからぬ癖を持つ北の方の御人柄を推し量ることができるだろう。男君の方も、このような女性をまだ知らずいとお思ひになつて、浅くはなかつた二人の前世の縁をお話しなさるにつけて、北の方が左衛門督と無関係ではないと聞いたことをお思ひ出しになつて、

⑦「もっぱら私にとっては他人事のように聞き流していたのに、あなたの浮気相手を私は恨むのでしょうか。」

私の言うことは道理に合っていないのでしょうか」と申し上げなされると、

北の方はますます辛く、弁明する言葉もないとお思ひである。

⑧今から先はあなたの御出でだけを待っている私なのですから、他の人に愛情を分けるような浮気などしましょうか。

男君はこの北の方に心がひかれられないわけでもなく、今まで未経験のことだから魅力があると思ひではあるが、人目もうるさいので、暁も待たずに起きて北の方に別れをお告げになつた。

【考察】

梅見の宴の最中に太政大臣が退席した件は、

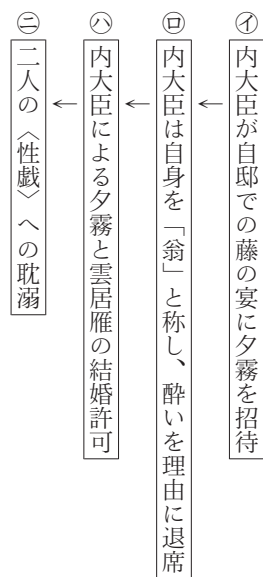
⑨大臣は例の我しもとく酔ひ給ふ癖にて、「無下に無礼にはべり」とて入り給ひぬれば、……

と語られており、『源氏物語』藤裏葉巻で夕霧が内大臣（もとの頭中將）から自邸における藤の宴に招待され、長年にわたつて実現しなかつた雲居雁との結婚を内大臣が許すという件と酷似している。すなわちそれは、

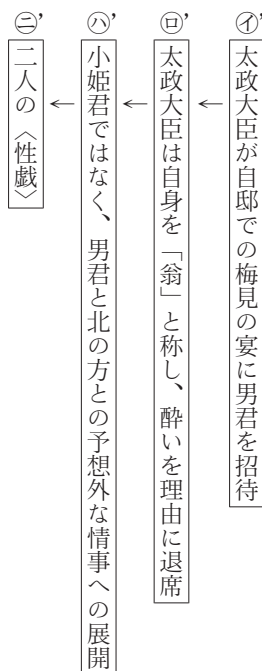
⑩大臣、「朝臣（私云、内大臣の長男柏木）や、（夕霧ノ）御休み所求めよ、翁（私云、内大臣）いたう酔ひすすみて無礼なれば、まかり入りぬ」と言ひ捨てて入り給ひぬ。

とあり、引用文⑩と⑨の傍線部が類似している点から、⑩が⑨に影響を及ぼしたと指摘されている（辛島A）。両作品において、太政大臣と内大臣は自身のことを「翁」と称しており、男君は太政大臣から梅見の宴に招待され、太政大臣が酔いを理由に退席した後、男君と北の方との間で〈性戯〉が繰り広げられることになる。それは内大臣が酔いを理由に退席した

後、結婚を許された夕霧と雲居雁が〈性戯〉に耽る状況と酷似しているのだ。とすれば、太政大臣の退席は男君と北の方との情事の契機が語られているのではないのか。そこで両者を簡単に図式化すると、藤裏葉巻は、



となる。一方、『風に紅葉』においても、



となり、藤と梅の差異があるだけで、話筋は極めて酷似しているものの、①と②には差異が生じているのであり、そこに『風に紅葉』が『源氏物語』から新たな趣向を産出しているのを垣間見ることができよう。

その後に次のような描写が続く。

③ 女（私云、北の方）の御気色近くてはいとど愛敬づき、をかしげにおはするに、酔ひ少し進みぬるまめ人（私云、男君）の御心もいかがありけん。夕月夜の影

はなやかに差し入りて、梅の匂ひもかごとがましきに、姫君の御新枕にはあらで、あやしの乱りがはしさを。

傍線部のこの情景は何のために語られているのだろうか。辛島Aは「ほろ酔い加減に、月影・梅の薫りと、情事を誘う条件が揃う」と指摘しているわけだが、傍線部によれば、男君にとって夕月の光が明かる過ぎるとともに、梅の花の匂いも強いので、それらを避けるために奥深い部屋に入り、酔いが少々回って、理性が朦朧としている「まめ人」男君は北の方相手に早く〈性戯〉に取りかかりたいという思いが強かったのではないのか。そのため奥深い部屋に入る口実が必要であったのであり、月光の明かるさと梅の強烈な匂いは口実に過ぎなかったのだ。それが「かごとがましき」と語られているのであり、その一語に語り手の揶揄的言説がこめられているのではなからうか。

ところで、太政大臣が酔いを理由に退席したために、男君を恋慕する北の方にとっては邪魔者がいなくなったわけだが、情交の比喩である「女」という語が最初に北の方に用いられている点に注意しておく必要がある。北の方が男君に積極的で、「まめ人」である男君も〈性〉への欲望を制御できなかったのか、男君と北の方との間で〈性戯〉が繰り広げられるのである。それゆえに「姫君の御新枕にはあらで、あやしの乱りがはしさを。あさはかにとりあへざりける御契りかな」と草子地の形で揶揄的に語られているのだ。

一一 男主人公、一品宮に昨夜のことを報告、北の方との度重なる密会女宮の御さまのことわりにも過ぎておほどかに、ただもてなしきこえ給

ふまに、うち靡なびきておはしますぞ、まめやかに年月の積もるにつけては、
*あはれのみ深うおぼえ給ふ。一節ひとふしの隔てもあらじとにや、今宵こよひのことも語
りきこえ給ふに、うちあひしらはせ給ひたるなども、さるは言ふかひな
らず、心恥こづづかしげにもおはします。かしこへの御文、

⑨忘れめや梅が枝え匂えふ宵よひの間の明くるを待たぬうたた寝の夢

大臣おとどにも嬉うれしかりし御もてなしのやう、行く末の御後見うしろみおろかなるまじき
よしなど聞こえ給へる御返り、そぞろに喜びきこえ給へるもをかし。片つ
方には、

⑩うたた寝の夢に心は消え果てて今も現うつと思ひ分かれず

その後はうたた寝の夢のみ度重たびなれば、いとどかたみにおろかならぬ御
心ざしのみぞまさるべかんめるほど、大納言などやうやう気色見給ふべ
かむめり。左衛門督さゑもんのかみ、忍しのぶる片つ方のやうも心得られ給ひて、その後はとに
かくにつれなき御気色きしきも恨めしけれど、たとしへなき人の御さまには、こ
とわりに言ふかひあらじ、と静かにあらまほしき本性にて、思ひ忍び給ひ
けり。

【語釈】

*女宮——一品宮。 *あはれのみ深うおぼえ給ふ——主語は男君。 *かしこ
——北の方。 *行く末の御後見——太政大臣から男君に依頼された小姫君に
対する世話。 *片つ方——北の方からの返事。 *⑩「うたた寝の」の歌——
『伊勢物語』六十九段のいわゆる斎宮譚にある「君や来し我や行きけむ思
はず夢か現か寝てか覚めてか」あなたがやって来たのか、私が行ったの
か、よくわからない。夢なのか、現実なのか寝ていたのか、目をさまして
いたのか」の女（斎宮か）の歌が下敷きになっているか。 *うたた寝の夢

——男君と北の方との密会。 *大納言——太政大臣の息で、左衛門督の兄の
権大納言か。太政大臣の二人の息子に対して北の方は継母に当たる。 *忍
ぶる片つ方——北の方の密会相手である男君。 *御気色——北の方の。 *た
としへなき人の御さまには、ことわりに言ふかひあらじ——たとえようもな
いほどすばらしい男君には、北の方が魅せられるのは当然のことで、今更
何を言ってもはじまらない。

【訳文】

女一宮の御様子はひどくおっとりしていて、ただ男君がお世話申し上げ
なさるのに任せて、心を寄せていらっしやるので、年月が積もるにつけて、
男君は本当にしみじみといとしい気持ちばかりが深くなっていくのをお感
じになる。ほんの少しでも隔て心を持つまいとするのだろうか、男君は昨
夜の太政大臣邸のことをお話し申し上げなさるが、それにお答えになる
一品宮の御様子なども、実は取るに足りないわけではなく、すばらしくて
いらっしやる。男君の北の方への御文は、

⑨忘れることがありましようか。梅が枝が匂う宵の間が明けるのを待た
ずに別れたうたた寝の夢、二人の短い逢瀬のことを。

太政大臣にも嬉しかった御もてなしのこと、また、小姫君の将来に対する
御世話ごせわは疎略そりやくには扱あつかうまいということなどを申し上げなさったその御返事
に、太政大臣がやたらに喜び申し上げなさるのも滑稽である。北の方の返
事には、

⑩つかの間の逢瀬に私の心はすっかり消えてしまつて、今でも夢なのか
現実なのか区別がつかないのですよ。

その後は北の方との逢瀬ばかりが度重なるので、ますます互いに言い尽

くせないような御気持ちだけがまさっていく間に、大納言などは次第にその様子がおわかりになったようだ。左衛門督は、北の方の密通相手のこともお気付きになって、その後は何やかやとつれない北の方の御様子も恨めしいけれども、たえようもないほどずばらしい男君の御様子に、北の方が心ひかれるのも当然で仕方のないことだろう、と左衛門督は落着いた好ましい人柄であるので、耐え忍んでいらっしやった。

【考察】

男君は一品宮に対して昨夜の北の方との情事を報告した後、太政大臣に手紙をしたためるわけだが、それは、

大臣にも嬉しかりし御もてなしのやう、(小姫君へ)行く末の御後見おろかなるまじきよしなど聞こえ給へる御返り、そぞろに喜びきこえ給へるをかし。

と語られており、①と㊥とは密接に連動している。①は表面上では男君が大臣に対して梅見の宴に招待されたことへの礼を述べたものだが、裏面では大臣がいつものように酔っ払って早々と退席したので、北の方との〈性戯〉に思う存分耽ることができたと皮肉っぽく語られているのではなかろうか。ちなみに、辛島Aは「自分の妻が寝取られたことも知らないで喜んでいるなんて、おめでたいこと」と述べているように、大臣は早く寝てしまったために知らない可能性もあるが、男君は北の方との情事に耽っていたことが皮肉を混じえて語られようとしたのではなかろうか。㊥には大臣が小姫君の将来における世話を依頼したところ、男君がそれを承諾したことへの謝意が語られているわけだが、①と呼応して、北の方のことを何も知らない大臣がむやみに礼を述べているのは滑稽だと語られている。とす

れば、最後の「をかし」は、男君の心中思惟とも草子地とも受け取れるが、いずれにせよ、北の方に関して何も知らない間抜けな大臣が笑いの対象として語られていることになる。そのことが「をかし」という一語に顕在化しているのだ。つまり、男君と大臣との間で受け取り方をめぐってのズレが生じているのであり、大臣が何も知らずにいる間に、北の方が男君との間で〈性戯〉に耽っていたと語られている点を看過すべきではなかろう。

一二 梅壺女御の主人公への恋慕

かの「かざしの花」言ひかけ給ひしは、この人々の御妹、梅壺の女御なりけり。このほどかく渡り給ふよし聞き給ふに、心も心ならず、急ぎ出で給ひてけり。殿の内のやう癖々しからず、あまりなるまで直面にて、継母の上ともいつとなう一つにのみ戯れきこえ給ふほどに、姫君譲りきこえ給ふことのやうも語りきこえ給へば、かたみに言はまほしき人の上はうちも置かれず、去年の臨時の祭の還立に、かかることなしたりし心惑ひなども語りきこえ給ふ。

【語釈】

*かざしの花―巻一・六節の①歌。 *この人々の御妹―権大納言や左衛門督の妹で、太政大臣の娘。 *渡り給ふよし―男君が梅壺女御の実家である太政大臣邸にお越しになつていてということ。 *癖々しからず―素直であること。 *直面―隠し立てをしないこと。 辛島Aは「太政大臣家の気風は、ひねくれたところがなく、ゆきすぎなくらいに隠し立てをしないのであって」という。 *継母の上ともいつとなう一つにのみ戯れきこえ給ふほどに―継母と継子との関係は〈継子譚〉に象徴されるごとく、仲

が悪く、継母による継子への「へいじめ」が存するのが通常だが、この二人の関係は「反継子譚」と言っても差し支えないような仲の良さである。

* 姫君譲りきこえ給ふこと―北の方所生の小姫君が太政大臣から男君に対して世話を依頼されたこと。* 人の上はうちも置かれず―北の方も梅壺女御も関心のある男君のことを話題にせずに放って置くことはできず。

* かかること―男君に歌を詠みかけたこと。

【訳文】

あの石清水の臨時の祭に「かざしの花」と詠みかけなされた方は、この人々の御妹の梅壺女御であった。最近、男君が太政大臣邸にお越しになっているということをお聞きになって、気が気ではなく、急いで宮中を退出なさった。大臣家の様子はひねくれたところがなく、むやみに隠し立てをせず、継母北の方ともいつも一緒に遊び興じ申し上げなされているので、北の方は太政大臣が小姫君を男君にお譲り申し上げなされる事情もお話し申し上げなされると、互いに話題にしたい男君のことは放って置けず、梅壺が昨年の臨時の祭の還立に、男君に歌を詠みかけた際の心の乱れなどもお話し申し上げなされる。

一三 男主人公、梅壺女御たちを垣間見

* 麗景殿も出で給ひ、折節集ひ給へれば、三月のついたち過ぎたるほど、花は風に散り紛ひて、夕月夜の影をかしきに、御琴ども弾き合はせて遊び給ふ折節、大将、内裏よりまかで給ひけるままに、例の立ち寄り給へるに、かかれば、ものの音する方の唐垣のあはひより見給へば、柳の衣に葡萄染めの小桂着たる人は、端を後ろなる髪のかかり、後ろ手、優なるもてなし、

気配、上なんめり。あづまをぞ弾き給ふ。みな廂の御座なり。奥の方に、樺桜にや夜目にはけぢめ見えぬ衣どもに、紅の単衣、山吹の小桂着て、琵琶弾き給ふは、梅壺なんめり。まみおしのべ、中盛りにて、唐絵に描きたる女の団扇持ちたるにぞ似給へる。もてなし、気配は、おれかへり若びて見え給ふぞ、見る目には違ひて受けられぬ。また傍らに、箏の琴、その色となきまでかき重ね、わららかに弾きなして、いとふくらかに鼻引き入りたる心地して、山吹の匂ひに桜の小桂着給へるは、麗景殿なるべし。今ぞ盛りと心地よげなるもむつかしく、我が同胞の女御と御覧じ比ぶらん。春宮の御覚えもことわりことわり、とおぼえ給ふ。小姫君、桜萌黄にや濃き単衣、花山吹の小桂着て、これも琵琶をぞ弾き給ふ。ことのほか姉君たちにはまさりて、匂ひうつくしげなり。左衛門督、簀子に候ふ。うち嘆きたる気色にて笛は吹きやみて、「竹河の橋の詰なる」と唱ひすきみて、「思ひやみぬる」など独りごちて出でぬるに、この唐垣をやをら開けて歩み出で給へる火影、追風よりはじめ、紛ふべき御さまならで、のどやかに高欄のもとに寄り居給ふに、覚えなうあさまうて、御簾をば下ろしつ。梅壺の御方の中納言の君、御褥さし出でたれど、ただそこもとに居給ひて、「大臣のよろづ内外なき御もてなしに、いづれの御方にも思し隔てられはべらじ、と心をやりてなん」と聞こえ給へば、中納言の君ぞ御答へは聞こゆる。移る心に忍びかね給へる御心地、言ひ知らず。

【語釈】

* 麗景殿―太政大臣の娘で、春宮の女御であるが、寵愛は薄い。* 出で給ひ、折節―全集は「出で給ふをりふし」とする。* 例の立ち寄り給へるに―いつものように男君は北の方との密会目的で、太政大臣邸に立ち寄

りなされたところ。*ものの音する方の唐垣のあはひより見給へば―以下、男君の垣間見が続く。月が出ているものの薄暗くて、そこにいる人物は男君の視野に曖昧にしか入って来ないので、「上なんめり」「梅壺なんめり」「麗景殿なるべし」と傍線部に象徴されるように、推量表現が多出する。*端―全集は「階」とする。*まみおしのべ―目尻が細長く切れている様子をいうか。*中盛り―鼻の中央が高くなっている様子をいうか。*おれかへり―ぼおっとして、しまりのないことをいうか。*受けられぬ―認められない。ちなみに、「感心しない」(辛島A)、「好ましくない」(全集)と訳されている。*わららかに弾きなして―派手にかき鳴らして。*鼻引き入りたる心地して―鼻が低いということか。*今ぞ盛り―「尋ねつる我をや春も待ちつらん今ぞ盛りに匂ひましける」花を求めにやって来た私を春も待っていたのだろうか。今が満開だと桜が美しく咲いている」(金葉集・春・三〇・崇徳院)に拠る。*むつかしく―うっとうしく。*我が同胞の女御―男君の妹で春宮の宣耀殿女御。春宮の寵愛が厚い。*「竹河の橋の詰なる」―「竹河の 橋の詰なるや 花園 にはれ／花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女たぐへて」(催馬楽・呂・竹河)。辛島Aは「北の方を大将に奪われた左衛門督の、多分に自虐的な気分が看取される」と述べる。*「思ひやみぬる」―「このめはる春の山田を打ち返し思ひ止みにし人ぞ恋しき」木の芽がふくらんできたので春になって山の田を耕すように、あきらめた人のことが再び恋しく思われることだ」(後撰集・恋一・五四四・よみ人知らず)、「梓弓春のあら田を打ち返し思ひ止みにし人ぞ恋しき」あの人といった愛情を持つのをやめたが、春になって再び荒田を耕すように、改めて考え直してみるとやはり恋しい」(拾遺集・恋三・八二二・よみ人知らず)に拠る。*火影―灯火に照

らされた姿。*追風よりはじめ―香をたいて着物にたきしめた結果、追風によってあたりに漂っている香りをはじめとして。*内外なき―女性の部屋に自由に出入りすること。*心をやりてなん―全集は「安心してね」と訳す。*御心地―梅壺女御の。

【訳文】

麗景殿女御も退出なさり、折しも皆がお集まりになったので、三月上旬を過ぎた頃、花は風のせいで散り乱れ、夕月の光が美しいので、御琴などを合奏して遊んでいらっしゃるちょうどその時、大将は宮中から退出なさるやいなや、いつものように太政大臣邸にお立ち寄りなされたところ、このような様子であったので、音楽の聞こえてくる方の唐垣の隙間から御覧になると、柳の衣に葡萄染めの小桂を着た人は、簀子を背にして髪が垂れ下がった様子や後ろ姿、優美な振る舞いや物腰から、北の方らしい。東琴をお弾きになっている。皆廂の間に座っていらっしゃる。奥の方には、樺桜であろうか、夜目には区別がつかない衣に、紅の単衣、山吹の小桂を着て、琵琶を弾いていらっしゃるのは梅壺女御であるらしい。目尻が細長く切れて、鼻の真ん中が高く、唐絵に描かれた女が団扇を持った姿に似ていらっしゃる。その振る舞いや物腰が、ぼおっとしてしまりがなく幼稚でいらっしゃるように見えるのは、見た目と違ってすばらしいとは思われない。またその側で、箏の琴を音色が聞き取れないほど派手にかき鳴らし、頬が大そうふくらとして鼻が低い感じで、山吹襲に桜の小桂を着ていらっしゃるのは麗景殿なのであろう。今が最盛期だと満足そうな様子もうっとうしく、男君は我が妹の宣耀殿女御と見比べていらっしゃるのだろう。春宮が妹を寵愛なさるのも至極もつともだとお思いである。小姫君は、桜萌黄

なのだろうか、濃い単衣に花山吹の小桂を着て、こちらも琵琶を弾いていらっしゃる。思いのほか姉君たちよりもすぐれていて、美しく愛らしい様子である。左衛門督は簀子に控えている。ため息をついている様子で笛を吹くのを途中でやめて、「竹河の橋の詰なる」と口ずさんで、「思いやみぬる」などと独り言をつぶやいて出て行ったので、男君はこの唐垣をそっと開けて歩み出ていらっしゃって、灯火に照らされた姿や、追風によってあたりに漂っている香りをはじめとして、他人と見間違ふことのない御様子で、ゆったりと高欄のあたりにもたれかかっていらっしやると、御方々は思いも寄らず驚きあきれて、御簾を下ろしてしまった。梅壺付きの中納言の君が、御褥を差し出したが、男君はその場にお座りになって、「大臣が万事私を身内の者として扱って下さるので、どの御方にも嫌がられてはおりませんまい、と心を慰めています」と申し上げなされると、中納言の君がお答え申し上げる。男君に首ったけで押さえ切れない梅壺の御氣持は、言いたいようもない。

【考察】

三月上旬を過ぎた夜、男君は内裏からの帰途、太政大臣邸を訪れたところ、北の方をはじめ、継子に当たる梅壺女御と麗景殿女御、実の娘である小姫君といういわば太政大臣家に所属する女性たちが一堂に会しているのを垣間見た件が語られている。この件は、ある好色な男が「やむごとなきところにて、物言ひ懸想せし人は、このごろ里にまかり出でてあなれば、まことかと思ひてけしき見むと思」って、垣間見たところ、二十余人の姉妹たちが一堂に会し、自分たちの仕える各々の女主人を花になぞらえて談話している状況が語られている『堤中納言物語』所収の『はなだの女

御』の個所と類似している。とすれば、一人の女性や姉妹の二人を垣間見たのではなく、数多くの姉妹たちを垣間見たという点において、両作品の関わりが考えられるのではなからうか。

さらに、その垣間見の後半は、

左衛門督、簀子に候ふ。うち嘆きたる気色にて笛は吹きやみて、「竹河の橋の詰なる」と唱ひすさみて、「思ひやみぬる」など独りごちて出でぬるに、……

と語られている。男君に北の方を奪われた左衛門督は一人ぼつねんと催馬楽「竹河」を口ずさんでいるのは、「多分に自虐的な気分が看取される」(辛島A)わけだが、「竹河」の最終句「少女たぐへて」に注目すると、「一人女をわたしにくれ」(鑑賞日本古典文学第四巻『歌謡』I 角川書店一九七五・五)と解する考えがあるように、男君に傾いた北の方の代わりに小姫君を自分に与えてほしいと暗に要求しているのではなからうか。とすれば、男君に与えられそうになった小姫君を奪って、北の方を奪われた鬱憤を晴らせると考えて、左衛門督は「竹河」を口ずさんだのだ。ちなみに、『源氏物語』竹河巻において、薫は故鬚黒大臣の姫君たちを念頭に置いて故大臣の息藤侍従に、前述の「竹河」を利用して、「竹河のはしうち出でし一節に深き心のそこは知りきや」(「竹河」を謡った一節の中に、私の深い心はわかっていただけたでしょうか)の歌を詠んだことが語られている。

(未完)

(おおくら ひろし 本学名誉教授)